

It is...that...構文の that 節内の動詞の形について
—The British National Corpus の調査結果に基づいて—

溝端清一（近畿大学）

I. はじめに

英語教育にたずさわる日本人教師が英語表現の語法的な疑問に突き当たった際、まず掘り所とするのは国内外で出版された辞書や文法・語法書である。しかし、どの辞書や文法・語法書も当該の項目について納得のいく記述がなされていない、あるいは記述に疑問があるといったことが往々にして起こる。従って、適切な現代英語の標準的な語法を知るには、その言語を日常的に用いる複数の英語母語話者に、ある特定の言語表現について意見を訊き集約する方法が極めて有効な手段と考えられる。しかし、この方法は言語が使用される環境設定が限られたものにならざるを得ず、使用分野、使用域などの観点からの違いといった細かな環境設定の下に意見を訊くことが難しい。より客観的な使用の実態を観察するためには、幅広い分野から同じ量のデータをランダムにバランスよく抽出して作成された大規模コーパスを用いた調査が是非必要である。大規模コーパスを用いた調査結果は、複数の母語話者の直観に基づく調査結果と対立するものではなく、補完し合うものとして役立つと考えられる。ブラウン・コーパスに代表される明確なコーパス・デザインを持つ英語のコーパスが 1960 年代に世に出て以来、様々なコーパスが今日までに構築されて来たが、現代英語の大規模なサンプル・コーパス⁽¹⁾の代表として The British National Corpus(BNC)を挙げるができる。このコーパスは、Oxford University Press を主幹として Longman、Chambers、British Library、Oxford University Computing Service、Lancaster 大学の共同プロジェクトとして 1991 年から構築が始まり 1994 年に完成した品詞標識付きイギリス英語のコーパスである。保有語数約 1 億語の内訳は、話し言葉 10% (10,365,464 語)、書き言葉 90% (89,740,544 語) で、使用分野別に見ることができるばかりか様々な社会統計学的な分析に耐えるように作成されている。⁽²⁾

本稿では、英語の日本人学習者や教師の間でしばしば問題になる語法の中から、It is...that...構文の that 節内の動詞の形の問題を取り上げ、母語話者の直観に基づく判断と The British National Corpus の調査結果を総合させ、使用の実態を明らかにしたいと考える。

II. It is...that...構文の語法と英語母語話者のアンケート結果

一般的に辞書や文法・語法書では、It is...that...構文において、「必要」・「欲求」などを表す形容詞に続く that 節内の動詞は、主に米国用法では仮定法現在形を用い、主に英国用法では should を伴うと記述されている。又、「驚き」・「意外」・「遺憾」などを表す形容詞や名詞に続く that 節内では、直説法または should を伴うと解説されている。⁽³⁾

このような辞書や文法・語法書で一般化されている that 節内の動詞についての記述が、

果たして現在の英語の実態を反映したものであるかどうかを確認するには、先ず複数の母語話者の直観に基づく調査が必要である。2002年に旺文社から出版された花本金吾他編『旺文社レクシス英和辞典』には当該の項目について教養ある英語圏在住英語母語話者[米国(41人)、英国(41人)]にアンケート調査した次のような結果を掲載している。(4)

(1) 「必要」・「欲求」などを表す形容詞に続く that 節内の動詞のアンケート結果

Q 次の文で[]内のどの形を使いますか(複数回答可)。(5)

It is necessary that Tom [should help / help / helps] me.

	USA	UK
should help	25%	61%
help	75%	29%
helps	58%	88%

(2) 「驚き」・「以外」・「遺憾」などを表す形容詞や名詞に続く that 節内の動詞のアンケート結果

Q 次の[]内のどの形を使いますか(複数回答可)。(6)

It is surprising that he [should make / make / makes] such a careless mistake.

	USA	UK
should make	85%	98%
make	22%	12%
makes	41%	44%

上記(1)の『旺文社レクシス英和辞典』の米・英の母語話者に対するアンケート結果では、“【米】では通説通り仮定法現在形の使用率が高く、次いで直説法動詞の使用率が高い。しかし、【米】でも仮定法現在形を使わない人が25%いる。【英】では通説に反して直説法の使用率が一番高く、should は2番目である。仮定法現在形は【旧】と感じられ使用率は低い。”と結論付け、“essential、desirable についても同様の調査をしたが、necessary の場合と比べて使用率に大きな差異は見られない。”と結んでいる。(7)

(2)の場合、“【米】、【英】ともに should を用いた形の使用率が非常に高い。仮定法現在形の使用率は【米】でも低い。この点で「必要」や「欲求」を表す necessary、essential、desirable などの場合と異なっている。”と結論付けている。「驚き」・「意外」・「遺憾」などを表す形容詞・名詞の例として surprising 以外に strange、a pity が挙げられていて、これらについても同じような結果であったと理解せざるを得ない記述となっている。(8)

III. The British National Corpus(BNC) の調査結果

『旺文社レクシス英和辞典』に掲載された米・英の母語話者を対象に行なわれたアンケート結果を踏まえ、BNCを用いた調査を行なった。(9) 調査では、『旺文社レクシス英和辞典』の場合と同様、「必要」・「欲求」などを表す形容詞として、necessary、essential、desirable を選び、「驚き」・「意外」・「遺憾」などを表す形容詞・名詞として surprising、strange、a pity を選んだ。BNCは、話し言葉[10%(10,365,464語)]と書き言葉[90%

(89,740,544 語) から構成されているが、話し言葉は語数が少ないため今回の調査では有意な結果が出なかったため、書き言葉で調査した結果を報告する。BNCの書き言葉のデータは、分野別や社会統計学的な観点からの調査が可能である。従って、今回は、書き言葉の (i) 分野、(ii) 作者の性別、(iii) 作者の年齢の観点から調査を行ない、違いを観察した。BNCの書き言葉の (i)、(ii)、(iii) の構成は次の通りである。⁽¹⁰⁾

(i) 分野(1.は創作散文、2.~9.は情報散文)

1. Imaginative	19,664,309
2. Natural and pure science	3,752,659
3. Applied science	7,369,290
4. Social science	13,290,441
5. World affairs	16,507,399
6. Commerce and finance	7,118,321
7. Arts	7,253,846
8. Belief and thought	3,053,672
9. Leisure	9,990,080
10. Others	1,740,527
計	89,740,544 語

(ii) 作者の性別

1. Male	31,586,324
2. Female	15,497,994
3. Mixed	5,268,444
4. Unknown	2,594,892
5. Others	34,792,890
計	89,740,544 語

(iii) 作者の年齢

1. 0~14(歳)	581,962
2. 15~24	437,149
3. 25~34	1,325,516
4. 35~44	2,813,226
5. 45~59	2,847,335
6. 60~	2,451,519
7. Unknown	79,283,837
計	89,740,544 語

以下において、(1)「必要」・「欲求」などを表す形容詞[①necessary、②essential、③desirable]及び、(2)「驚き」・「意外」・「遺憾」などを表す形容詞や名詞[①surprising、②strange、③a pity]の後に続く that 節内の動詞の形が、(a)should + 動詞の原形、(b)仮定法現在形、(c)直説法動詞の何れを取るかについて、分野、作者の性別、作者の年齢の観点から調査して得た用例数を列挙する。⁽¹¹⁾

(1) 「必要」・「欲求」などを表す形容詞

① necessary

(i)分野

	(a)	(b)	(c)	計
1. Imaginative	3	1	0	4
2. Natural and pure science	4	0	2	6
3. Applied science	5	5	2	12
4. Social science	13	12	2	27
5. World affairs	7	5	3	15
6. Commerce and finance	6	3	9	18
7. Arts	0	1	0	1
8. Belief and thought	1	5	1	7
9. Leisure	1	0	1	2
計	40(43.5%)	32(34.8%)	20(21.7%)	92(100%)

(ii)作者の性別

	(a)	(b)	(c)	計
1. Male	21	20	13	54
2. Female	4	4	0	8
3. Mixed	1	1	0	2
4. Unknown	0	0	0	0
計	26(40.6%)	25(39.1%)	13(20.3%)	64(100%)

(iii)作者の年齢

	(a)	(b)	(c)	計
1. 0～14	0	0	0	0
2. 15～24	1	0	0	1
3. 25～34	0	1	0	1
4. 35～44	5	6	0	11
5. 45～59	2	1	0	3
6. 60～	7	2	2	11
計	15(55.6%)	10(37.0%)	2(7.4%)	27(100%)

② essential

(i)分野

	(a)	(b)	(c)	計
1. Imaginative	6	3	4	13
2. Natural and pure science	5	11	13	29
3. Applied science	4	8	23	35
4. Social science	41	48	57	146

5. World affairs	27	25	35	87
6. Commerce and finance	10	31	65	106
7. Arts	2	6	8	16
8. Belief and thought	2	9	4	15
9. Leisure	6	19	29	54
計	103(20.6%)	160(31.9%)	238(47.5%)	501(100%)

(ii)作者の性別

	(a)	(b)	(c)	計
1. Male	42	55	85	182
2. Female	14	12	10	36
3. Mixed	2	4	8	14
4. Unknown	0	0	0	0
計	58(25.0%)	71(30.6%)	103(44.4%)	232(100%)

(iii)作者の年齢

	(a)	(b)	(c)	計
1. 0～14	0	0	0	0
2. 15～24	2	0	0	2
3. 25～34	2	2	4	8
4. 35～44	8	6	5	19
5. 45～59	6	5	7	18
6. 60～	6	4	11	21
計	24(35.3%)	17(25.0%)	27(39.7%)	68(100%)

③ desirable

(i)分野

	(a)	(b)	(c)	計
1. Imaginative	2	0	0	2
2. Natural and pure science	2	2	0	4
3. Applied science	3	5	0	8
4. Social science	34	6	1	41
5. World affairs	13	3	1	17
6. Commerce and finance	5	5	1	11
7. Arts	1	3	0	4
8. Belief and thought	3	0	0	3
9. Leisure	1	0	2	3
計	64(68.8%)	24(25.8%)	5(5.4%)	93(100%)

(ii)作者の性別

	(a)	(b)	(c)	計
1. Male	28	8	2	38
2. Female	8	6	0	14

3. Mixed	3	1	0	4
4. Unknown	0	0	0	0
計	39(69.6%)	15(26.8%)	2(3.6%)	56(100%)

(iii) 作者の年齢

	(a)	(b)	(c)	計
1. 0～14	0	0	0	0
2. 15～24	1	2	0	3
3. 25～34	1	2	0	3
4. 35～44	0	1	0	1
5. 45～59	8	2	1	11
6. 60～	4	0	0	4
計	14(63.6%)	7(31.8%)	1(4.6%)	22(100%)

(2) 「驚き」・「意外」・「遺憾」などを表す形容詞・名詞

① surprising

(i) 分野

	(a)	(b)	(c)	計
1. Imaginative	7	2	20	29
2. Natural and pure science	2	12	46	60
3. Applied science	6	24	47	77
4. Social science	27	46	173	246
5. World affairs	30	26	211	267
6. Commerce and finance	8	17	65	90
7. Arts	9	12	67	88
8. Belief and thought	8	5	25	38
9. Leisure	5	22	41	68
計	102(10.6%)	166(17.2%)	695(72.2%)	963(100%)

(ii) 作者の性別

	(a)	(b)	(c)	計
1. Male	59	66	346	471
2. Female	13	18	64	95
3. Mixed	7	13	48	68
4. Unknown	0	0	0	0
計	79(12.5%)	97(15.3%)	458(72.2%)	634(100%)

(iii) 作者の年齢

	(a)	(b)	(c)	計
1. 0～14	0	0	0	0
2. 15～24	0	2	4	6
3. 25～34	5	1	8	14

4. 35～44	11	12	84	107
5. 45～59	13	13	60	86
6. 60～	6	10	35	51
計	35(13.3%)	38(14.4%)	191(72.3%)	264(100%)

② strange

(i)分野

	(a)	(b)	(c)	計
1. Imaginative	18	2	24	44
2. Natural and pure science	1	0	3	4
3. Applied science	0	0	6	6
4. Social science	5	3	4	12
5. World affairs	9	2	18	29
6. Commerce and finance	2	1	5	8
7. Arts	8	0	8	16
8. Belief and thought	0	1	2	3
9. Leisure	3	2	9	14
計	46(33.8%)	11(8.1%)	79(58.1%)	136(100%)

(ii)作者の性別

	(a)	(b)	(c)	計
1. Male	20	4	28	52
2. Female	9	4	15	28
3. Mixed	1	1	1	3
4. Unknown	0	0	0	0
計	30(36.2%)	9(10.8%)	44(53.0%)	83(100%)

(iii)作者の年齢

	(a)	(b)	(c)	計
1. 0～14	0	0	0	0
2. 15～24	0	1	2	3
3. 25～34	0	0	2	2
4. 35～44	5	1	1	7
5. 45～59	4	1	5	10
6. 60～	5	1	11	17
計	14(35.9%)	4(10.3%)	21(53.8%)	39(100%)

③ a pity

(i)分野

	(a)	(b)	(c)	計
1. Imaginative	3	0	21	24
2. Natural and pure science	0	0	3	3
3. Applied science	0	1	14	15
4. Social science	0	1	10	11

5. World affairs	1	1	16	18
6. Commerce and finance	0	1	3	4
7. Arts	0	0	12	12
8. Belief and thought	0	1	0	1
9. Leisure	1	0	17	18
計	5(4.7%)	5(4.7%)	96(90.6%)	106(100%)

(ii) 作者の性別

	(a)	(b)	(c)	計
1. Male	0	2	18	20
2. Female	3	0	21	24
3. Mixed	1	2	14	17
4. Unknown	0	0	0	0
計	4(6.6%)	4(6.6%)	53(86.8%)	61(100%)

(iii) 作者の年齢

	(a)	(b)	(c)	計
1. 0～14	0	0	0	0
2. 15～24	0	0	0	0
3. 25～34	0	0	1	1
4. 35～44	1	0	6	7
5. 45～59	0	1	7	8
6. 60～	0	0	2	2
計	1(5.6%)	1(5.6%)	16(88.8%)	18(100%)

IV. 調査結果の分析

上記 III. で得た結果を、『旺文社レクス英和辞典』のイギリス英語の母語話者に対して行なったアンケート結果と比較しながら以下に分析する。

(1) 「必要」・「欲求」などを表す形容詞

① necessary

分野別の調査では、総じて見た場合、『旺文社レクス英和辞典』の使用率[(a)61%、(b)29%、(c)88%]と一致しない。BNCでは、(a)が一番頻度が高く、(b)、(c)と続く。アンケート結果と唯一一致するのは、'6. Commerce and finance'の分野のみである。創作散文'1. Imaginative'と情報散文の中で語数の近い'4. Social science'や'5. World affairs'と比較した場合、創作散文の出現数が少ない。男女別の調査では、男女共(a)、(b)はほぼ同数出現するが、女性の場合、(c)は一例も出現しない。年齢別の調査では、'4. 35～44'の年齢では出現が(a)、(b)に集中し、'6. 60～'の年齢では(a)でもっぱら出現する。

② essential

分野全体では、(c)が一番頻度が高く、(b)、(a)と続く。旺文社のアンケート結果と一致するのは、'5. World affairs'の分野のみである。創作散文の出現数は少ないが、創作散文では(a)が一番頻度が高く、情報散文とは異なった頻度順位を示している。男女別に

見た場合、大きな違いがある。男性は、(c)が一番頻度が高く、(b)、(a)の順であるのに対して、女性は、(a)が一番頻度が高く、(b)、(c)と続く。年齢別では、'5. 45～59'及び'6. 60～'の年齢の頻度順位が(c)、(a)、(b)で、旺文社のアンケート結果と一致する。

③ desirable

分野全体で見ると、旺文社のアンケート結果とまったく一致せず、(a)の頻度が一番高く、続いて(b)である。(a)に(b)を加えると、全体の頻度数の殆んどを占め、(c)の頻度は極めて低い。創作散文の出現数が非常に少ない。男女別の調査では、男性の場合(a)の出現頻度が非常に高く、女性の場合(c)は一例も出現しない。年齢別に見た場合、用例自体の総出現数が少ないながら、'5. 45～59'の年齢で突出して出現している。

(2)「驚き」・「意外」・「遺憾」などを表す形容詞・名詞

① surprising

旺文社のアンケートによる使用率[(a)98%、(b)12%、(c)44%]では、(a)の使用率が圧倒的に高いのに対して、BNCの調査では、分野全体から見た場合、(c)の頻度が非常に高く、続いて(b)、(a)の順である。創作散文の出現数自体は少ないのだが、(c)の出現頻度が高い点では情報散文と同じで、(b)の出現頻度が低い点で異なる。男女別に見た場合、大きな違いはない。年齢別では、'3. 25～34'の年齢の(b)の出現頻度が非常に低い。

② strange

分野全体から見た場合の頻度順位は、(c)、(a)、(b)で、(b)の頻度が他よりかなり低い。創作散文と情報散文の違いは見られないが、創作散文の出現数は surprising の場合よりかなり多い。男女別に見た場合、男性は、女性に比べ、(b)の頻度が低い。年齢別に見た場合は、'4. 35～44'の年齢はもっぱら(a)が出現するのに対して、'5. 45～59'と'6. 60～'の年齢では(c)と(a)が出現する。

③ a pity

分野全体から見ても、分野別に見ても(c)の出現頻度が圧倒的に高く、(a)と(b)はあまり出現しない。創作散文と情報散文を比べた場合、共に(c)の出現頻度が圧倒的に高いが、(a)と(b)の比較では、創作散文の場合、(b)が一例も出現しない。男女別に見た場合、どちらも(c)の出現頻度が圧倒的に高い点では違いはないが、男性の場合、(a)は一例も出現せず、女性の場合、(b)は一例も出現しない。年齢別に見た場合、年齢間の有意な違いはない。

『旺文社レクシス英和辞典』には、「必要」・「欲求」などを表す形容詞として選んだ necessary、essential、desirable それぞれの that 節内の動詞の形[(a)、(b)、(c)]の使用率に大きな差異は見られないと記されている。又、「驚き」・「意外」・「遺憾」などを表す形容詞・名詞の例として surprising、strange、a pity を挙げ、surprising を用いて行なったアンケート結果が strange や a pity にも当てはまると理解せざるを得ない記述となっている。しかし、上記(1)、(2)の分野の調査結果の分析で明らかのように、分野全体を見た場合、どの形容詞及び名詞の場合も、旺文社のアンケートによる(a)、(b)、(c)の使用率の順位と、BNCの調査によって得られた(a)、(b)、(c)の出現頻度の順位とが一致しない。理由の一つとして次のようなことが考えられる。旺文社の母語話者に対

するアンケート調査は、“あなた自身はこの表現を使いますか。”といった具体的な環境設定を行わず、漠然とした環境設定の下で実施されているので、母語話者の方も具体的な環境を想定せずに答えてしまうことになる。⁽¹²⁾ 従って、話し言葉の場合と書き言葉の場合を区別した環境設定の下で調査すれば、異なった結果が予測できるが、旺文社の方法でのアンケート調査では、両方の場合の判断が混合すると考えられる。一方、今回のコーパス調査の場合は、実際の様々な環境の下に書かれた書き言葉のデータから抽出した結果であるので、調査した形容詞・名詞の中にはアンケート結果と極端な違いを示しているものがあると言える。

コーパスの分野を創作散文と情報散文に分けて比較した場合、essential、surprising、a pity において(a)、(b)、(c)の出現頻度に違いが見られた。男女別の比較でも、necessary、essential、desirable、strange、a pity に男女の違いが見られた。年齢別に調査した結果を分析すると、necessary、essential、desirable、surprising、strange においてそれぞれの形容詞独自の特徴を見出すことができた。

V. おわりに

BNCを用いた It is...that...構文における形容詞及び名詞の調査の結果、that 節内の動詞の形[(a)should + 動詞の原形、(b)仮定法現在形、(c)直説法動詞]の使用頻度は、旺文社の母語話者に対するアンケートによるそれらの使用率とは異なることが明らかになった。更に、創作散文と情報散文別、男女別、年齢別に観察すると、それぞれの形容詞及び名詞は、独自の特徴を示していることが分かった。これは、BNCの調査と旺文社のアンケート調査のどちらの方がより信頼性の置ける結果であるのかという問題ではないと考えられる。母語話者に対するアンケート結果は、母語話者の直観による言語使用の可能性を示すものであり、コーパス調査によって得られたものは、具体的な使用環境の下で実際に使用された結果を示すものである。母語話者が使用可能であるとした表現が、コーパス調査で見えるとは限らない。又、母語話者ならその言語のあらゆる言語表現の可能性を予測できる訳ではなく、予想外の結果をコーパス調査で得られる場合がある。両者の結果は相補的に捉えるべきものと言える。しかし、旺文社のアンケート調査が教えているように、アンケート調査を行なう場合、母語話者の国籍・人数、教育レベル、性別・年齢のバランスといった要因以外に、質問する言語表現が使用される具体的な環境設定をして調査を行わないと、結果の信頼度が下がるのではないかと考えられる。今回のBNCの調査のように、分野別ばかりか、性別、年齢別という社会統計学的な観点からの観察を行なった結果、that 節内での動詞の形の選び方にそれぞれの形容詞あるいは名詞独自の特徴があることが明らかとなった。この事実は、「必要」・「欲求」などの形容詞あるいは「驚き」・「意外」・「遺憾」などの形容詞・名詞という名の下に分類された形容詞や名詞の特徴や働きについて、単純に大雑把な通説に従ったり、母語話者の判断を妄信してしまうと、個々の語の真の実態を見失ってしまうことになることを示唆している。

注

- (1) 幅広い分野から同じ量のデータをランダムにバランスよく抽出して作成されたコーパス。話し言葉なのか書き言葉なのか、fictionか non-fictionか、著者の年齢、性別等基準をきちんと定めてデータ収集が行なわれる点で、モニター・コーパスと異なる。
- (2) BNCの話し言葉部は、内容から集めた話し言葉と人口統計学上から集めた話し言葉から成り立っている。書き言葉部のテキストは、分野、出所、出版年の3つの大きな基準から選択されている。分野では、自然科学、応用科学、社会科学、世界情勢、商業、芸術、思想・信条、娯楽等の情報を伝える情報散文と、文学などの創作物を対象にした創作散文に分かれる。出所では、本、新聞などの定期刊行物、会社のパンフレットなどの雑多な印刷物等が含まれている。共時コーパスとしての性格を保てるように、1975年から1993年までの出版物から選ばれているが、創作散文には1960年から1974年に出版されたものも含まれている。その他、著者についての情報（性別、年齢等）、対象となる読者についての情報、出版地やサンプル抽出部分等の情報が与えられているので、BNC専用検索ソフト(BNC web)を使うと社会統計学的な観点からの検索が可能である。
- (3) Michael Swan, *Practical English Usage*(Oxford University Press, 1980), p.518; R. Quirk et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language*(Longman, 1985), p.1224; A.J.Thomson and A.V.Martinet, *A Practical English Grammar* 4th ed.(Oxford University Press, 1986), p.210; 小西友七他, 『ジーニアス英和大辞典』(大修館書店, 2001), p.598, p.743, p.1463 参照。
- (4) 花本金吾他, 『旺文社レクシス英和辞典』(旺文社, 2002), pp.xviii-xix 参照。
この辞典が従来の英和辞典にはない画期的な点は、日本人学習者や教師の間でしばしば問題になる文法や語法に関して、103人の教養ある英語圏在住英語母語話者からなる語法パネルを組織して、語法調査を行なったことである。103人の内訳は、オーストラリア(7人)、ニュージーランド(5人)、カナダ(9人)、英国(41人)、米国(41人)である。選出に当たっては、次の点が留意されている。
 - ① 出生地、幼児期の生活地域、初等教育・中等教育を受けた場所、本人が自分の英語をどの地域の英語を代表するものとして理解しているかを考慮に入れて代表する国を定める。
 - ② 米・英の英語母語話者の比率を40%程度になるようにする。
 - ③ 可能な限り男女・年齢層のバランスを取る。
 - ④ 学歴に関しては、いずれも現在大学生であるか、または既に大学を卒業した英語母語話者であることを条件にする。
- (5) 同上, p.1242 参照。
- (6) 同上, p.1903 参照。
- (7) 同上, p.1242 参照。
- (8) 同上, p.1903 参照。
- (9) 調査には、CD-ROM版 *The British National Corpus—World Edition*(The

Humanities Computing Unit of Oxford University, 2000)とBNC専用検索ソフトBNC *web* を用いた。

- (10) 鷹家秀史・須賀 廣, 『実践コーパス言語学』(桐原ユニ, 1998), pp.203-204 参照。
- (11) 調査した用例の中で、that 節内の主語が1人称単数・複数、2人称単数・複数、3人称複数の場合、一般動詞が仮定法現在形か直説法動詞か判断が困難な用例がいくつかあった。今回の調査では、それらを仮定法現在形として扱った。
- (12) 『旺文社レクシス英和辞典』, p.xix 参照。